カフカのテクスト *Eine kaiserliche Botschaft* の構造

――文芸技法の言語学的分析――

西　嶋　義　憲

0. はじめに

カフカのテクストには文芸上の技法がこらされていることが多い。小品 *Eine kaiserliche Botschaft*（『皇帝の綸旨』）というテクストにも様々な技法が認められる。本稿の目的は、このテクストを言語学的に分析し、用いられている技法を明らかにすることにある。

1. 問題提起

筆者はかつてカフカのテクストを分析し、いくつかの技法を明らかにしてきた。カフカの作品では、とりわけ繰り返しという技法が効果的に使用されている。対話の展開に関わるものにしぼって紹介しよう。たとえば、否定行為あるいは質問行為の繰り返しがなされる場合があるが、結果として知らぬ間にテーマや次元のズラシなどが引き起こされることになる。すなわち、同一言語行為の繰り返しによって通常認められる形式に慣らしておき、結果としてその形式の過剰な展開によって整合性のある意味世界の構築を妨げてしまうという技法である。たとえば、*Kinder auf der Landstraße*（『国道の子供たち』）では質問行為の繰り返しの中で、„Leute“ から „Narren“ へと表層上のテーマが変化させられている。これによって、意味論上の焦点が拡散し、意味論レベルでの整合性が失われる（西嶋 2001b）。同様に、同一行為の繰り返しという手続きによって、次元間で移動が生じる場合もある。たとえば、*Die Bäume*（『木々』）では否定行

為の繰り返しによって主観世界から客観世界へ（西嶋 1990）、また、質問行為の繰り返しによって *Von den Gleichnissen*（『寓意について』）では言明内容とメタ表現の間で、*Der Brunnen*（『泉』）では発話のレベルから語りのレベルへとそれぞれ移動が起きている（西嶋 2000, 2001a）[1]。本稿で取り上げる *Eine kaiserliche Botschaft* にも繰り返しという技法が巧みに利用されている。本稿ではそれを分析し、明らかにしたい。

Eine kaiserliche Botschaft に関する多くの先行研究では、そのような形式面よりも、むしろ内容面、つまり、同じ作品集に収められている他の作品との内容的な連関を論じているものが多い。たとえば、新田(1987)、Meurer (1988)、Ando (1988)、松浦(1994)、Gray (1995)、相沢(1999)、Zimmermann (2004: 140-141)など、いくつかの分析は提出されている。しかしながら、これらの先行研究では、テクストの言語表現の問題はそれほど重点的に論じられず、その構造的特徴が明らかにされていない。そこで、本稿では、このテクストを言語学的に分析することにより、本テクストの構造的特徴とそこに見られるカフカの技法の抽出を試みる。

本テクスト *Eine kaiserliche Botschaft* は、未完の *Beim Bau der Chinesischen Mauer*（『シナの長城』）から採取され、雑誌 *Die Selbstwehr*（『自己防衛』）に掲載されたのち、カフカの生前に出版された短篇集 *Ein Landarzt*（『田舎医者』）に収録されている小品である（Binder 1975: 218-220）。

テクスト自体は短いので、全文を引用しておく[2]：

Eine kaiserliche Botschaft

Der Kaiser - so heißt es - hat Dir, dem Einzelnen, dem jämmerlichen Untertanen, dem winzig vor der kaiserlichen Sonne in die fernste Ferne geflüchteten Schatten, gerade Dir hat der Kaiser von seinem Sterbebett aus eine Botschaft gesendet. Den Boten hat er beim Bett niederknieen lassen und ihm die Botschaft ins Ohr

---

[1] その他の技法については、西嶋 (2005; 2016)を参照のこと。なお、「*Der Brunnen*（『泉』）」は筆者がこの断片テクストを分析した際に名づけた名称である。

[2] *Druck zu Lebzeiten*. Hrsg. von Wolf Kittler, Hans Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt/M.: Fischer, 1996, pp. 280-282.

zugeflüstert; so sehr war ihm an ihr gelegen, daß er sich sie noch ins Ohr wiedersagen ließ. Durch Kopfnicken hat er die Richtigkeit des Gesagten bestätigt. Und vor der ganzen Zuschauerschaft seines Todes - alle hindernden Wände werden niedergebrochen und auf den weit und hoch sich schwingenden Freitreppen stehen im Ring die Großen des Reichs - vor allen diesen hat er den Boten abgefertigt. Der Bote hat sich gleich auf den Weg gemacht; ein kräftiger, ein unermüdlicher Mann; einmal diesen, einmal den andern Arm vorstreckend schafft er sich Bahn durch die Menge; findet er Widerstand, zeigt er auf die Brust, wo das Zeichen der Sonne ist; er kommt auch leicht vorwärts, wie kein anderer. Aber die Menge ist so groß; ihre Wohnstätten nehmen kein Ende. Öffnete sich freies Feld, wie würde er fliegen und bald wohl hörtest Du das herrliche Schlagen seiner Fäuste an Deiner Tür. Aber statt dessen, wie nutzlos müht er sich ab; immer noch zwängt er sich durch die Gemächer des innersten Palastes; niemals wird er sie überwinden; und gelänge ihm dies, nichts wäre gewonnen; die Treppen hinab müßte er sich kämpfen; und gelänge ihm dies, nichts wäre gewonnen; die Höfe wären zu durchmessen; und nach den Höfen der zweite umschließende Palast; und wieder Treppen und Höfe; und wieder ein Palast; und so weiter durch Jahrtausende; und stürzte er endlich aus dem äußersten Tor - aber niemals, niemals kann es geschehen -, liegt erst die Residenzstadt vor ihm, die Mitte der Welt, hochgeschüttet voll ihres Bodensatzes. Niemand dringt hier durch und gar mit der Botschaft eines Toten. - Du aber sitzt an Deinem Fenster und erträumst sie Dir, wenn der Abend kommt.

つぎに日本語訳を載せておく[3]。

皇帝の綸旨

皇帝が――と伝説には語られている――きみに、一介の人物、微々たる小

[3] 川村二郎訳『皇帝の綸旨』『決定版カフカ全集 1』新潮社, 1992, p. 112-113.

臣、皇帝の太陽からおよそはるけさのきわみに遠ざかった、眼にもとまらぬ小さな影、ほかでもないそのきみに、皇帝が、崩御の床から、綸旨(りんじ)を送ったのだ。使節を皇帝は床のかたわらにひざまずかせ、綸旨のおもむきを耳にささやいた。これに心を煩わすことが非常であったので、そのおもむきを自分の耳にささやき返すよう、命じさえした。うなずいて皇帝は、その言葉の正しさを承認した。崩御を見守る人々すべての眼の前で――眼をさえぎる壁はことごとく取りこわされ、たかだかと延びている広い階段の上には、帝国の貴顕たちが立ち並んでぐるりと皇帝を囲んでいた――これらすべての人々の前で、皇帝は使節を派遣した。使節は即刻出発した。疲れを知らぬたくましい男である。その時々に、腕を交互に突き出し、彼は群集をかき分けて進む。道がとどこおると、太陽の紋章をつけた自分の胸を指し示す。そして誰にも叶わぬほどやすやすと先へ進む。しかし群集はまことにおびただしい。彼らの住居はどこまでも続いている。ひろびろと開けた野に出さえすれば、彼は翔ぶがごとくに疾走し、やがてきみは、使節の拳がきみの門口の戸を叩く高らかな音を耳にするだろう。しかし実は、彼は甲斐のない苦闘をつづけているばかりなのだ。いまだに彼は、中央宮殿の間から間へと、必死の思いでたどりつづけている。どこまで行っても終りそうにない。かりにそれが終ったとしても、成功とは少しもいえない。階段を降りるのに大変な苦労がいる。かりに階段が終ったとしても、成功とは少しもいえない。御苑をいくつも通りぬけねばならない。そして御苑が終ればまた、二の丸の宮殿がある。そしてまた階段と御苑。そしてまた宮殿。こうして幾千年が過ぎ去って行く。そして使節がついに、王宮の大手門からまろび出たとしても――しかしそんなことは未来永劫、起り得ようはずがない――彼の前にひろがるのはまだ、帝国の首都の眺めにすぎない。おびただしい滓がうずたかくたたみ重なる、世界の中心。誰ひとりここを突き抜けることはできない。あまつさえ、今は死者となった皇帝の綸旨をたずさえて、それが叶うはずはない。――しかしきみは、夕暮ごとにわが家の窓辺に坐って、その綸旨のおもむきを夢のように思いやるのである。

2. 形式的構造分析

このテクストは複数の文からなっているが、基本的にピリオドがあるものを1文とした（cf. Ando 1988）。ピリオドを目安に、テクストを区分し、それぞれに便宜的に番号を付した。ハイフンで囲まれた文は語り手による挿入コメントととらえ、中心となる文の補足とみなし、当該文の数字にダッシュ（プライム）をつけて示してある。また、セミコロンで区切られた文は、ピリオドほどの独立性はないと判断し、セミコロンで区切られた複数の文全体で1文と見なすことにした。個々の文の区別にはa, b, cといったアルファベットを利用した。

その結果、このテクストは大きく10文に分けられることとなった。(1)は、*Der Kaiser*（皇帝）で文が始まるが、その名詞句の直後にハイフンによるコメント(1')が挿入されている。(2)はセミコロンで接続された2つの文(2a)と(2b)からなる。(3)は1文のみ。(4)にはハイフンによるコメント(4')が挿入されている。(5)はセミコロンで接続された5文からなる。ただし、(5b)は述語のない名詞句のみである。(6)はセミコロンでつなげられた2文からなる。(7)は並列の接続詞 *und* を介した重文である。(8)はセミコロンによって接続した12文からなり、また、ハイフンによるコメント(8')が挿入されている。(9)は1文のみ。そして、(10)はハイフンによって導かれる1文である。

この *Eine kaiserliche Botschaft* というテクストは、過去形、現在完了形、現在形の時制[4]の使用が特徴的である。

話法については、通常の直説法のほかに、接続法２式が使われている。それ

---

[4] この点については、同じ短編集に収録されている『田舎医者』も同様である。『田舎医者』は時制の転換によって意識の変化が巧みに提示される興味深い作品である。たとえば、前半で過去形から現在形にかわる契機は、女中が馬丁に抱きしめられたことにある。これは主人公にとって心理的なショックであり、語り手の意識が、事態が起こっている現場へと移った結果だと捉えることができる。後半部で、現在形で表現する語りから距離をおく過去形に一旦もどり、そして再び現在形になる契機については、現在形から過去形にもどるのは、事態が収束して、つまり、往診に呼ばれた原因である病気の件が落着したので、距離をおく報告が可能になったからと解釈できる。最後の部分で過去形から現在形になる場は、歌にある。歌は現在形で書かれている。歌はパフォーマンスであり、現実との連関が強いので、これが現実に引き戻す効果があったと考えられる。

は、基本的に、現在における非現実の条件文とその帰結を表している。

このような時制や法による特徴的な表現を分析するために、時制の違いがわかるように印をつけることにした。具体的には、過去を表す過去形と現在完了形の文には下線を、接続法２式には網掛けを施した。現在を表す現在形はそのままにしてある。また、文の区分をわかりやすくするために、文ごとに改行した。

(1) Der Kaiser (1')- so heißt es - hat Dir, dem Einzelnen, dem jämmerlichen Untertanen, dem winzig vor der kaiserlichen Sonne in die fernste Ferne geflüchteten Schatten, gerade Dir hat der Kaiser von seinem Sterbebett aus eine Botschaft gesendet.

(2a) Den Boten hat er beim Bett niederknieen lassen und ihm die Botschaft ins Ohr zugeflüstert; (2b) so sehr war ihm an ihr gelegen, daß er sich sie noch ins Ohr wiedersagen ließ.

(3) Durch Kopfnicken hat er die Richtigkeit des Gesagten bestätigt.

(4) Und vor der ganzen Zuschauerschaft seines Todes (4')- alle hindernden Wände werden niedergebrochen und auf den weit und hoch sich schwingenden Freitreppen stehen im Ring die Großen des Reichs - vor allen diesen hat er den Boten abgefertigt.

(5a) Der Bote hat sich gleich auf den Weg gemacht; (5b) ein kräftiger, ein unermüdlicher Mann; (5c) einmal diesen, einmal den andern Arm vorstreckend schafft er sich Bahn durch die Menge; (5d) findet er Widerstand, zeigt er auf die Brust, wo das Zeichen der Sonne ist; (5e) er kommt auch leicht vorwärts, wie kein anderer.

(6a) Aber die Menge ist so groß; (6b) ihre Wohnstätten nehmen kein Ende.

(7) Öffnete sich freies Feld, wie würde er fliegen und bald wohl hörtest Du das herrliche Schlagen seiner Fäuste an Deiner Tür.

(8a) Aber statt dessen, wie nutzlos müht er sich ab; (8b) immer noch zwängt er sich durch die Gemächer des innersten Palastes; (8c) niemals wird er sie überwinden; (8d) und gelänge ihm dies, nichts wäre gewonnen; (8e) die Treppen hinab müßte er sich kämpfen; (8f) und gelänge ihm dies, nichts wäre gewonnen;

(8g) die Höfe wären zu durchmessen; (8h) und nach den Höfen der zweite umschließende Palast; (8i) und wieder Treppen und Höfe; (8j) und wieder ein Palast; (8k) und so weiter durch Jahrtausende; (8l) und stürzte er endlich aus dem äußersten Tor (8') - aber niemals, niemals kann es geschehen -, liegt erst die Residenzstadt vor ihm, die Mitte der Welt, hochgeschüttet voll ihres Bodensatzes.

(9) Niemand dringt hier durch und gar mit der Botschaft eines Toten.

(10) - Du aber sitzt an Deinem Fenster und erträumst sie Dir, wenn der Abend kommt.

3. 構造記述の試み

このテクストを、時制と関連付け、その内容に関してコメントを施して、構造記述を行うことにする。

3.1. 第１文

(1) 現在完了形

Der Kaiser (1')- so heißt es - hat Dir, dem Einzelnen, dem jämmerlichen Untertanen, dem winzig vor der kaiserlichen Sonne in die fernste Ferne geflüchteten Schatten, gerade Dir hat der Kaiser von seinem Sterbebett aus eine Botschaft gesendet.

Der Kaiser が死の床から 2 人称代名詞 *Dir* で指示される人物に対して *Botschaft*（知らせ）を送ったことが叙述される。

２人称代名詞の *Du* の 3 格形 *Dir* が *dem Einzelnen*, *dem jämmerlichen Untertanen*, *dem winzig vor der kaiserlichen Sonne in die fernste Ferne geflüchteten Schatten* というように漸次的に限定され、それを *gerade Dir* とまとめ、文が続けられる。

この文について、 (1')で 語り手による現在形のコメント文が挿入される。一般に、*so heißt es* の時制はコメントを受ける文の時制に一致するようだ。次の例のように、コメントされる文が現在なら現在形が、コメントされる文が過去なら過去になるのが普通である。

現在について現在形で使用する例[5]（太字による強調は筆者。以下同様）：

„ ‚Freiheit‘ ist ein großes Wort, **so heißt es**. ‚Freikauf‘ ist auch ein großes Wort“

過去に言及するニュースでは過去形で使用される例[6]：

Die Oberbürgermeisterin, **so hieß es**, sei „stinksauer” gewesen. Kein Wunder, die Schulsanierungen liegen auf Eis, seit sich die Kosten blitzartig verdoppelten, die Renovierung des Kunstmuseums ebenfalls, weil auch dort die Preise explodierten und unrealistische Größenordnungen von zuletzt sechs Millionen Euro annahmen.

ところが、このテクストでは言及される文(1)が現在完了形で書かれているが、コメント(1’)は現在形である。このように語り手が現在形によりコメントをする用法は、古い物語では比較的多く見られるという（橋本 2016, 147）。これにより、語り手は読者に直接的に話しかけているような印象を与えるようだ。そして、このコメントの後に、想定される読者として人称代名詞 *Dir* が使用され、その人物に対して直接的に物語っているような枠組みであることがわかる。

ついでながら、このテクストでは、この 2 人称代名詞はテクスト中ごろにある(7)とテクスト末の(10)において再度言及される。

3.2. 第 2 文

（2a）現在完了形

Den Boten hat er beim Bett niederknieen lassen und ihm die Botschaft ins Ohr zugeflüstert;

Der Bote(*Den Boten*, 使者)が *Kaiser* のベッドのもとに呼び出され、*die Botschaft* が耳元にささやかれる。

（2b）過去形

so sehr war ihm an ihr gelegen, daß er sich sie noch ins Ohr wiedersagen ließ.

その *Botschaft* (*ihr, sie*)は重要なので、*Der Bote* に復唱させる。

---

[5] https://www.gedenkort-kassberg.de/index.php/zeitzeugen/17-ausstellungen/190-unsere-ausstellung-in-giessen-eroeffnet-roland-jahn-am-2-oktober-2017

[6] http://www.derwesten.de/nachrichten/staedte/muelheim/2008/6/11/news-55001194 /detail.html

3.3. 第 3 文

(3) 現在完了形

Durch Kopfnicken hat er die Richtigkeit des Gesagten bestätigt.

その復唱内容が正しいことが *er* [Kaiser]により確認される。

3.4. 第 4 文

(4) 現在完了形

Und vor der ganzen Zuschauerschaft seines Todes (4')- alle hindernden Wände werden niedergebrochen und auf den weit und hoch sich schwingenden Freitreppen stehen im Ring die Großen des Reichs - vor allen diesen hat er den Boten abgefertigt.

Der Kaiser の死(*seines Todes*)を見届ける *der ganzen Zuschauerschaft* の前で *den Boten* が送り出される。

(4') で現在形のコメント文が挿入されるが、*der ganzen Zuschauerschaft* への配慮として、視界を妨げる壁がとりこわされることが説明される。現在形の使用によって、語り手が、その事態がまさに起きている現場から直接語っているような臨場感を与える。このことはそれに続く *vor allen diesen* の近接の指示代名詞の使用からもわかる。

vor der ganzen Zuschauerschaft が *vor allen diesen* というように限定されるのは(1)と同じ構造である。

3.5. 第 5 文

(5a) 現在完了形

Der Bote hat sich gleich auf den Weg gemacht;

Der Bote が出発したことが述べられる。

(5b) 名詞句のみ（1 格）

ein kräftiger, ein unermüdlicher Mann;

テクスト内で目下、焦点が当てられている *Der Bote* を説明する名詞句であるが、動詞句は欠如している。これは、時制のない表現を挟むことによって語り

の視点が語り手の現在に限定を受けず、視点の移動を巧妙かつスムーズに行なう手段と考えられる。これに続く(5c)以降、現在形の文が続く。したがって、語りの視点が、物語られる事態が起こっている場へ移動することになる。これは歴史的現在という用法で、臨場感を醸成する働きをもつ（Helbig & Buscha 1977, 125）。

上では、記述される名詞句を「*Der Bote* を説明する名詞句」と述べたが、これは語り手による *Der Bote* に関するコメントと捉えることができる。後で詳しく見るように、この作品は語り手によるコメントが比較的多く認められる。

（5c）現在形

einmal diesen, einmal den andern Arm vorstreckend schafft er sich Bahn durch die Menge;

er [der Bote]の移動の際、*die Menge* を掻き分けていることが報告される。*diesen* という近接関連の指示代名詞の使用から、語り手の視点の位置が、語られる事態が生じている場にあることがわかる。それが臨場感をかもし出すことに貢献しているといえる。

（5d）現在形

findet er Widerstand, zeigt er auf die Brust, wo das Zeichen der Sonne ist;

接続詞 *wenn* の省略された条件文が提示され、移動の際、抵抗があれば、胸の *das Zeichen der Sonne* を示すことが述べられる。

（5e）現在形

er kommt auch leicht vorwärts, wie kein anderer.

前文に言及された *das Zeichen der Sonne* により、他者とは違って、容易に先に進むことができることが示される。

3.6. 第 6 文

（6a）現在形

Aber die Menge ist so groß;

Aber で文が開始され、(5c)で言及された *die Menge* の状態が説明される。つまり、(5e)で提示されていたようには *leicht* でないことが示唆される。

（6b）現在形

ihre Wohnstätten nehmen kein Ende.

kein Ende という表現により *ihre Wohnstätten* に終わりのないことが報告される。

3.7. 第 7 文

(7) 接続法 2 式（現在）

Öffnete sich freies Feld, wie würde er fliegen und bald wohl hörtest Du das herrliche Schlagen seiner Fäuste an Deiner Tür.

wenn 省略の接続法 2 式の条件文により、実現不可能な非現実の内容が提示される。つまり、前文の *ihre Wohnstätten* がなくなったら、という非現実世界の提示である。この文では(1)で言及された 2 人称代名詞 *Dir* の 1 格形 *Du* とその所有冠詞の *Deiner* が出現する。ここで、このテクストにおける想定される読者の *Du* とのつながりが想起・確認される。

3.8. 第 8 文

（8a）現在形

Aber statt dessen, wie nutzlos müht er sich ab;

Aber statt dessen で開始され、前文(7)で叙述されるような事態にはならず、今後の行動が *nutzlos* に終わることが示される。

（8b）現在形

immer noch zwängt er sich durch die Gemächer des innersten Palastes;

前文で叙述された *nutzlos* の根拠が示される。しかも、*immer noch* の使用により、*er* [der Bote]の行動が果てしなく繰り返されることが述べられる。ここで *die Gemächer des innersten Palastes* というように *Palastes* に言及されていることに注意しておこう。後段でもこの語が移動の障害として繰り返されるからである。

（8c）現在形

niemals wird er sie überwinden;

(8b)で叙述された行動が、 *niemals* の使用により、*Bote* が *überwinden* するという結果に終わらないことが、推量の助動詞 *werden* をともなって語られる。

(8d) 接続法 2 式（現在）

und gelänge ihm dies, nichts wäre gewonnen;

wenn 省略の接続法 2 式条件文により、前文で言及された困難の克服が達成できたとしても、何の利益にもならないことが、*nichts wäre gewonnen* という帰結文で示される。この帰結文の語順に注意すると、主節定形動詞から始まらず、*nichts* が先頭に来ていることがわかる。これは認容文であることを示している（橋本 1982, 234）。この文は以下の(8f)でも繰り返される。

(8e) 接続法 2 式（現在）

die Treppen hinab müßte er sich kämpfen;

前文の帰結の根拠として、悪戦苦闘して *die Treppen* をおりなければならないことが示される。*die Treppen* は移動の障害として、以下にある(8i)でも言及される。

(8f) 接続法 2 式（現在）

und gelänge ihm dies, nichts wäre gewonnen;

und に続けて、(8d)と全く同じ表現が繰り返される。*wenn* 省略の非現実の接続法 2 式の条件文とその帰結として、*nichts wäre gewonnen* が認容の形式で述べられる。

(8g) 接続法 2 式（現在）

die Höfe wären zu durchmessen;

(8e)と同様に、前文の帰結の根拠が提示される。つまり、*die Höfe* を端から端まで通らなければならないという困難が述べられる。

(8h) 動詞句の省略された表現

und nach den Höfen der zweite umschließende Palast;

und のあと、時間的後を表わす前置詞句 *nach den Höfen* と 1 格名詞句 *der zweite umschließende Palast* が提示される。この表現は、上記の(8d)および(8f)の *und gelänge ihm dies, nichts wäre gewonnen* と基本的に同じ構造をもつことがわかる。つまり、*nach den Höfen* は（非現実の）条件として提示され、*der zweite umschließende Palast* はその帰結としての困難あるいは障害の叙述と解釈できるからである。なお、*Palast* については(8b)で言及されている。

(8i) 動詞句の省略

und wieder Treppen und Höfe;

前文の内容の帰結に付け加えて、畳み掛けるように、*und wieder* のあと、移動の障害となる 2 つの名詞句 *Treppen und Höfe*（おそらく 1 格形）が移動の障害として提示される。*Treppen und Höfe* はすでに(8e)と(8g)で移動の邪魔物として言及されている。

（8j）動詞句の省略

und wieder ein Palast;

前文の内容にさらに畳み掛けるように、同じ *und wieder* が用いられ、その後に、(8h)で示されたのとは異なる名詞句の *ein Palast*（1 格形）が障害として記される。

（8k）動詞句の省略

und so weiter durch Jahrtausende;

前文の内容に続けて畳み掛けるように、さらに継続を表わす *und so weiter* が用いられ、これまでの空間的な困難もしくは障害ではなく、計り知れない時間経過を表わす前置詞句 *durch Jahrtausende* が提示される。ここで、空間と時間の両面において、移動の達成が困難であることが示される。

（81）接続法 2 式（現在）

und stürzte er endlich aus dem äußersten Tor (8’) - aber niemals, niemals kann es geschehen -, liegt erst die Residenzstadt vor ihm, die Mitte der Welt, hochgeschüttet voll ihres Bodensatzes.

und に続く *wenn* 省略の接続法 2 式の条件文によって、そのような困難である現実世界が解消され、*endlich* に一番外側の門から出られるという非現実の事態が提示される。そして、その条件文の直後にハイフンによって(8’) 現在形のコメント文が挿入される。これはこのような非現実の事態が起こりえないことが、可能性の助動詞の使用と *niemals* の 2 度の繰り返しによって強調される。そして、先ほどの接続法 2 式の非現実の条件文の帰結として、直説法現在の帰結文 *liegt erst die Residenzstadt vor ihm* が提示され、それでもまだ、*Palast* を出たばかりであることが強調される。帰結文が直接法現在形であるのは、語り手が事態の起きている現場から語っている印象を与える。このことは、次の文で *hier* が使用されていることからも頷ける。

3.9. 第 9 文

(9) 現在形

Niemand dringt hier durch und gar mit der Botschaft eines Toten.

hier の使用により、語り手は前文の *die Residenzstadt* の現場を目の当たりにして、これを通りぬけられないことを表現しているように解釈できる。そして、*eines Toten* という表現により、*der Kaiser* における特定性という限定が消去され、一般化され、誰の *Botschaft* なのかが不明確になっている。というのも、(4)では、*seines Todes* という表現が使用され、*der Kaiser* と関係づけられていることがわかるが、(9)ではそのような限定がないからである。したがって、この時点で、出発点となっていた *Kaiser* による *eine Botschaft* との関係が失われていることがわかる。

3.10. 第 10 文

(10) 現在形

- Du aber sitzt an Deinem Fenster und erträumst sie Dir, wenn der Abend kommt.

ハイフンに続けてこの文が導入される。ハイフンが、事態の起こっている物語場面から離れたことを表わしているのであろう。事実、(10)は *der Bote* が移動している場面からではなく、語り手が話しかけているであろう 2 人称代名詞 *Du* のいる場面から表現されている。その際、接続詞としてではないが、*aber* が用いられ、前文の内容との逆説的対比が示唆される。冒頭文で言及されたのと同一であろう *Du* で表わされる人物の習慣的行動が言及される。

4. 特徴の抽出

上記の言語学的構造分析からある種のパタンを引き出すことができそうである。

4.1. 枠構造

(1)と(10)の 2 文がこのテクストの基本的な枠組みを形成している。すなわち、(1)で 2 人称代名詞 *Du* によって表現される想定される読者に向かって、語り手

が物語り始める。(2)から(9)はその間の物語内容の詳細であり、その後、(10)により再び物語の始めの場面に接続するという枠組みである。

ここで、時制との関連を考えてみよう。物語では、過去の事態に言及する場合、通常、現在完了形よりも過去時制が用いられる。ところが、本作品では、現在完了形が多用されている（現在完了形５対過去形２）。一般に、現在完了形は、日常会話において過去の事象に言及する際しばしば用いられる(Helbig & Buscha 1977, 127f.; Dreyer & Schmitt 2000, 34)。その意味で、この時制の選択は、日常的なコミュニケーション行動と結びついている可能性が高い。事実、二人称代名詞（du, dir, dein-）がこのテクストにおいて出現しているのは、コミュニケーション行動との関連が強いからであろう。

これにより、このテクストが一般の「物語」と呼べるほどには描写される事態と語り手との間に距離がおかれていないし、客観化されていないことがわかる。

4.2. 容易から困難へ

テクスト前半部では、*Der Bote* が容易に目的を達成できるかのように叙述されるが、次第にそれが困難を極めることが漸次的に強調されていく。そして、最終的に目的が達成し得ないことを確認して、語りは「現実のコミュニケーションの世界」へと引きもどされる。

4.3. 繰り返し

4.3.1. 構文間の繰り返し

目的達成を妨げる障害について述べる際、繰り返しという技法が頻繁に、しかも多様な方法で使われている。たとえば、(5d)から(8l)にかけて、そのような、同じパタンの繰り返しという技法が確認できる。以下にまとめてみよう。

(5d) 困難な条件の提示→帰結。そして「解決という結果」の提示。

(6a) *Aber* により、「解決という結果」の否定。その根拠提示。

(7) 非現実世界の提示→帰結として理想的な世界、当初の目的達成という結果の提示。

(8a) *Aber* により、結果の否定。結局、*nutzlos* な行動になるという評価提示。

(8b) *nutzlos* な行動と判定する根拠としての「困難な状況」の提示。

(8c) 「困難な事例」は決して克服できないという克服困難性の提示。

(8d) 克服された非現実世界の提示→何も得られない（(8a)の *nutzlos* な行動の言い換え）

(8e) その根拠として「困難な状況」の提示。

(8f) 克服された非現実世界の提示→何も得られない（(8a)の *nutzlos* な行動の言い換え）

(8g) その根拠として「困難な状況」の提示。

(8h) 克服された非現実世界の提示→「困難な状況」の提示。

(8i) 「困難な状況」の追加。

(8j) 「困難な状況」のさらなる追加。

(8k) 「困難な状況」の局面の、空間から時間への変更提示。

(8l) 克服された非現実世界の提示（語り手による否定のコメント）→困難の継続提示。

以上のことから、つぎのような繰り返しが確認できる：

［困難→解決］（5d）

⇕

［否定→根拠（困難）］（6a）

⇕

［非現実世界→目的達成］（7）

⇕

［否定→無駄→根拠（困難）］（8a+8b+8c）

⇕

［非現実世界→無駄→根拠（困難）］（8d+8e）

⇕

［非現実世界→無駄→根拠（困難）］（8f+8g）

↓

バリエーション（8h+8i+8j+8k）

4.3.2. 言いさし

言いさし（中断）、表現の仕切りなおしで新規表現形成が認められる（(1)と(4)）。

4.3.3. 繰り返しを内包する語彙の使用

繰り返しに関わる語彙が特徴的に使用されている。

immer noch　((8a))
und wieder　((8h))
und wieder　((8i))
und so weiter　((8j))

関連する表現として永続性とのかかわる *kein Ende* がある（(6b)）。また、前半部に *wiedersagen* がある（(2b)）。「繰り返し」と関わる。(8l)では、*niemals, niemals* のように繰り返しが見られる。

4.4. 逆接の接続詞と否定

4.4.1. 逆接の接続詞 *aber*

上の構造記述で説明したように、後半部において *aber* が４回出現する。先行する文において提示された事態に制限を設けたり、否定したりし、それとは異なる事態がさらに提示される。

4.4.1.1. (6)の *Aber*

先行する文（5c）では、容易に前進していることが述べられているが、それがそれほど単純でない状況が提示される。先行文は肯定的、*Aber* を含む文は、否定的（*kein Ende*）。

4.4.1.2. (8)の *Aber*

先行する文では、非現実の事態が提示されている。そのようにならないことが提示される。先行文は肯定的、*Aber* を含む文は否定的（*nutzlos*）。

4.4.1.3. (8’)の *aber*

過去形の文による挿入。先行する文では、宮殿の一番外側の門にたどり着い

たならば、という非現実が提示され、それを否定するコメント（過去）が *aber* とともに導入される。先行文は肯定的、*aber* を含む文は、否定的（*niemals, niemals*）。

4.4.1.4. (10)の *aber*

先行する文では、死者のメッセージをもってここを通り抜けた者はいないことが指摘される。それにもかかわらず、待ち続ける事態が提示される。先行文は否定的（*Niemand*）だが、*aber* を含む文は肯定的。

4.4.2. 否定辞

後半部において否定辞が多用されている。

Niemals　((8b))
Nichts　((8c))
Nichts　((8e))
niemals, niemals（(8')）
Niemand　((9))

このような語彙の使用により、到達不可能性を強調していると考えることができる。

4.5. ハイフンとセミコロン

4.5.1. ２つのハイフンによる挿入文

本テクストには２つのハイフンによる挿入文が３箇所に現われている（(1')、(4')、(8')）。(1')と(4')では、過去事象の言明に対して、現在形でのコメントの際に使用されている。この場合の語り手は、語りが行われている現在に視点を置いている。他方、(8')は、語り手が過去に視点を移動させ、その地点から、現在形によってそこでの事態を生き生きと伝えようとする歴史的現在の用法の中に出現する。その場合の視点は事態が起こっている過去におかれ、その場からコメントがなされているといえる。

このハイフンによる挿入文は、コメントがなされる場は異なるが、すべて語り手によるメタコミュニケーション的なコメントと理解できる。

4.5.2. 一つのハイフンによる話題転換

最後の文（10）は、ハイフンによって導入、関連付けられている。これは、話題の転換とそれまでとは異なる情報の提供と理解できる。

4.5.3. セミコロン

セミコロンが多用されている箇所がある（(2)(5)(6)(8)）。ピリオドやコンマよりも内容的な連関が強く提示される。まとまりのある連続を形成している。畳み掛けるような緊張感のある印象を与える。

4.6. ２人称代名詞 *du* の分布とその役割

4.6.1. *du* の分布

テクスト内のコミュニケーション参与者であるが、実際の読者ではない。読者を取り込む手段と読むこともできよう。テクストでは、要所要所で出現し、しかもその関与の度合いが高くなる。

すべての時制と法に出現。ただし、後段にいくにしたがって、コミュニケーション上のかかわりが強化されていく。

① 過去（現在完了形）

Der Kaiser (...) hat Dir, (...) gerade Dir hat der Kaiser (...) eine Botschaft gesendet.

2 人称代名詞 *Dir* は、語り手―聞き手という枠組みでの聞き手として措定されているが、*eine Botschaft* が送られる相手ということで、物語自体との関係も認められる。

② 接続法 2 式

Öffnete sich freies Feld, wie würde er fliegen und bald wohl hörtest du das herrliche Schlagen seiner Fäuste an deiner Tür.

主語として出現するが、述語は感覚動詞なので主体的ではない。つまり、受動的に訪問を待つということである。

③ 現在形

- Du aber sitzt an deinem Fenster und erträumst sie dir, wenn der Abend kommt.

主語として出現し、述語も主体的動作に関わるので積極的な関与が認められる。しかしながら、それが *Der Kaiser* の知らせかどうかは別である。

4.6.2. テクスト構造との関連

これまでの議論から、このテクストの基本的な構造は、第 1 文と第 10 文の組み合わせとして理解可能である。実際にそのように変更を加えた形でテクストを提示してみよう：

> Der Kaiser - so heißt es - hat Dir, dem Einzelnen, dem jämmerlichen Untertanen, dem winzig vor der kaiserlichen Sonne in die fernste Ferne geflüchteten Schatten, gerade Dir hat der Kaiser von seinem Sterbebett aus eine Botschaft gesendet. - Du aber sitzt an Deinem Fenster und erträumst sie Dir, wenn der Abend kommt.

つまり、*Der Kaiser* が 2 人称代名詞 *Dir* で表される人物に *eine Botschaft* を送ったと言われている。しかし、*Du* はそれを窓辺で夢見ているに過ぎないのだ、という話である。この冒頭文と末尾の文の間に、*Der Bote* の行動が詳細に報告される話（エピソード）が挿入されているという構造である。その話の内部にも、2 人称代名詞が含まれる文が出現し、物語内容と想定される読者である *Du* との関連づけが確認されるが、基本的には (1)と(10)の 2 文でこのテクストは完結していると見なすことができる。このような話題のズラシは、*Die Bäume*（『木々』）においても認められる（西嶋 1990）。

5. おわりに

カフカのテクスト *Eine kaiserliche Botschaft* においても、カフカの他の作品で指摘されてきたような繰り返しの技法が確認できた。しかし、その意味合い、すなわちどのような効果を狙ったものなのかについては、立ち入った議論ができなかった。これは今後の課題とする。

文献

- 相沢正己：「ハプスブルク帝国のカリカチュア ―カフカの『皇帝の綸旨』―」 In: 早稲

田大学法学会『人文論集』第 38 号, 1999, 55-69.

- Ando, Hidekuni: Der fiktive Erzähler und das „Du“ bei Franz Kafka. In: 『愛媛大学法文学部論集 文学科編』第 21 号, 1988, 83-103.
- Binder, Hartmut: *Kafka Kommentar zu sämtlichen Erzählungen*. München: Winkler, 1975.
- Dreyer, Hilke & Richard Schmitt: *Lehr- und Übungsbuch der deutschen Grammatik*. Ismaning: Max Hueber Verlag, 2000.
- Gray, Richard T. (ed.): *Approaches to Teaching Kafka's Short Fiction*. New York: The Modern Language Association of America, 1995.
- 橋本文夫 :『詳解ドイツ大文法』第 32 版, 三修社, 1982.
- 橋本陽介 :『ナラトロジー入門 プロップからジュネットまでの物語論』. 水声社, 2014.
- Helbig, Gerhard & Joachim Buscha: *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. 4., durchgesehene Auflage. Leibzig: VEB Verlag Enzyklopädie, 1977.
- Meurer, Reinhard: *Franz Kafka, Erzählungen: Interpretation*. 2., überarb. u. erg. Aufl. München: Oldenburg, 1988.
- 西嶋義憲 :「カフカのテクスト *Die Bäume* を理解するために —テクストの多層性について—」 In:『かいろす』(「かいろす」同人）第 28 号, 1990, 31-44（Dt. Fassung.: „Zum Verstehen von Franz Kafkas Stück *Die Bäume* - Ein textlinguistischer Ansatz zur Vielschichtigkeit des Stücks - “. In: 『金沢大学文学部論集』第 20 号, 2000, 175-195）.
- 西嶋義憲 :「カフカ作品における対話の「歪み」 — *Von den Gleichnissen* のテクスト言語学的分析 —」 In: 日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第 33 号, 2000, 1-10 .
- 西嶋義憲 :「カフカ作品における次元の転換 —カフカのある『断片』のテクスト言語学的分析—」 In: 『金沢大学文学部論集』第 21 号, 2001a, 81-93.
- 西嶋義憲:「カフカのテクスト *Kinder auf der Landstraße* における対話の分析 —繰り返しの技法—」 In: 金沢大学言語教育研究センター『言語文化論叢』第 5 号, 2001b, 161-174.
- 西嶋義憲:『カフカと通常性—作品内対話における日常的言語相互行為の「歪み」—』. 金沢大学経済学部叢書 15, 金沢: 金沢大学経済学部, 2005.
- 西嶋義憲 :『カフカと「お見通し発言」—「越境」する発話の機能—』. 鳥影社, 2016.

- 新田誠吾 :「届かない知らせ ―フランツ・カフカ『皇帝からの知らせ』―」 In: 『藝文研究』第 51 号, 1987, 47-59.
- 松浦寿輝 :「帝国の表象」 In: 山内昌之・増田一夫・村田雄二郎編 :『帝国とは何か』岩波書店, 1994, 37-59.
- Schlingmann, Carsten: *Franz Kafka*. Stuttgart: Reclam, 1995.
- Zimmermann, Hans Dieter: *Kafka für Fortgeschrittene*. München: Beck, 2004.